

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年六月
	楽			蝸牛 総太郎			光雲2 俳爺 素風	展平 順一	暦文		のり子				
今じゃもう舞はぬ螢や祇王祇女	遠雷や俄かに鳥の羽繕い 季語が効いていると思いました。	モネの絵に重ね睡蓮見て居りし	顔見えぬほどアイリスを抱いた客	蚊遣火を腰に狭庭の草を引く 日常のひとつまを上手く切り取っている。	にわか雨宿れば鹿の子ついてくる	古本は樹に戻りつつ梅雨に入る	解禁の竿の連なる鮎の川 鮎解禁の川の景を的確に詠まれた。瀬に立つ釣り人の姿が見える。	昼寝するパンダの尻にお別れす 尻にお別れがいい。ユーモラスですね、パンダの尻に別れを告げるとは。	相合傘我の肩濡れあやめ咲く 肩は濡れても幸せ。	いつまでも途切れぬ話火取虫	風薫る君の眼を見ずプロポーズ シチュエーションが素敵。	腹ぺこや待てぬくちばし燕の子	夕焼に飛行機白く照り返し	短夜の交代するやホームラン 米山カラーリング	
光雲2	幸子	衛	しーしー	破れ蓮	ありぎりす	神谷たくみ	安田蝸牛	河野凡士	森佳月	檜鼻ことは	宇田靖之	岩本展平	良月		

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年六月
	山菜 俳翁	凡士 光雲 ² かれん 展平 暮風	六弦	土璃 みづる 絵夢 順一	ことは			破れ蓮 喜夫	梗舟	大越 ありぎり す	しんい 総太郎 直子	くるみ 幹子	ありぎり す みづる	一葉 素風	
夏の夕ほろ酔いかげん駅ピアノ	ソーダー水友達以上恋未満	宵宮や石鹼の香と擦れ違ふ	売り切れてはや店じまひ夕焼雲	子供傘じつと見ている雨蛙	夏花やちよこつと幸せ老いの庭	梅雨晴やファンタジックのガラス展	明日は明日風の吹くまま黒揚羽	奥宮の木暮るる道や苔生せり	辞書を繰る甚平の背な垣根越し	あめんぼう搔けども水の輪を出でず	難聴の耳にまつすぐ蟬の声	夏帽や旅の途中の駅ピアノ	ひっそりと自刃の句碑や青嵐	日雷宙に弧を画く打球かな	
一駄歩	岩清水彩香	後藤允孝	立野音思	いさむ	和田イチ子	しんい	ひろ志	松田素風	高原ひろし	俳翁	新井のり子	新 暦 文	くるみ	秋谷風舎	

季語が効いている。

日雷宙に弧を画く打球かな

凄絶な物語も今は風の中に記憶として残るのみ：青嵐の中、魂の安らかなことを祈る。

ひっそりと自刃の句碑や青嵐

ご自身が駅のピアノを弾いておられるのでしょうか。旅の解放感が感じられます。夏帽が良いと思います。演奏者はご本人でしょうか。それとも聞いていらつしやるのでしょうか。旅の良い思い出ですね。

夏帽や旅の途中の駅ピアノ

蟬の声つて80～90㏈；あるそうです、少々難聴な直に詠まれていて心を打たれました。

難聴の耳にまつすぐ蟬の声

水の輪を出たいと思っっているのはあなた？そりやそうだよとつこみました。

あめんぼう搔けども水の輪を出でず

何を調べているのでしょうか？

辞書を繰る甚平の背な垣根越し

木立が鬱蒼と繁つて、昼なお暗い様が見える。「木暮るる」が奥宮の神秘的な雰囲気を表し、「苔生せり」も静寂さのなかに時の流れと自然の力を感じる素敵な一句です。

奥宮の木暮るる道や苔生せり

明日は明日風の吹くまま黒揚羽

梅雨晴やファンタジックのガラス展

ほのぼのとした一句、日常にある幸せが一番です。

夏花やちよこつと幸せ老いの庭

ただ普通にそこに居る雨蛙ですが、こう切り取ると、ひとつの世界が表出します。小さな子供が蛙を飽かず観察している、でも、じつと見ているのは蛙のほうかも。情景が微笑ましい。アマガエルが子供傘をじつと見ている場面をこの句作者は見ている。絵になる句だと思えました。

子供傘じつと見ている雨蛙

夕方の静かな風景が印象的です。

売り切れてはや店じまひ夕焼雲

いいねえ！きつと浴衣の若い女性でしょう。宵宮に行くのにひと風呂浴びた人だったのだらうか。石鹼の香が良い。懐かしい石鹼の香。祇園祭の宵山に暑さの中涼しく感じる一瞬です。

宵宮や石鹼の香と擦れ違ふ

ソーダー水に焼酎を混ぜたらどうなるのか知りたいものです。既視感はあるが心もようが出ている。

ソーダー水友達以上恋未満

夏の夕ほろ酔いかげん駅ピアノ

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年六月
ヨネヤマ 風子 ひろ志	良月		たくみ	のり子			ひろし 音思	大越 直子	允孝 田猫	ことは くろみ 展平 あらか たくみ			音思	瞳人 楽 ひろし 暦文 佳月 暮風	
新たな命の知らせ田植時	ひと口で済まぬビールや友の通夜	夏来たりみつ豆の匙密やかに	夏来る戦隊モノのロケ現場	父の日や里の名入りの古風呂敷	白球を追ひ長嶋茂雄梅雨に逝く	落ちてなほ滝を昇るや夫婦鯉	行進のごとく向日葵立ち並び	縁側の節目に残る麦こがし	石庭の渦巻凜と風薫る	張り手には張り手で返す青蛙	父の日や川獺睨に手酌かな	大の字になりて仰げる新樹かな	解禁の竿の連なる鮎の川	帰省子のまづ大の字のごろ寝かな	
青木鶴城	大越マーガ レット	霜里	石関六弦	みづる	平野楽	小林土璃	かれん	山川充	龍野ひろし	森下山菜	瞳人	石井直子	安田蝸牛	荒一葉	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年六月
		絵夢				楽 あらか ひろ志	癒香	音思		良月 絵夢 田猫		たくみ		大越 良月 蝸牛 風舎	
白服や一泊の旅風まかせ	食感で選ぶ肴や海月食む	灰色の湿度が肥す梅雨曇 中七の措辞が新鮮。	苦は楽に青葉をつかむ手の如く	ふと見れば花にとまれる夏の蝶	町内の一斉掃除梅雨晴間	父の日の「お嫁になんか行かないわ」 小津安二郎の「晩春」を思い出しました。可愛い娘さんにお父さんで れで、と読むべきか、早く嫁に行つて孫の顔を見せてくれと嘆く父 親に反抗する今の娘さんと読むべきか。どちらにしても微笑ましい です。父思いの娘か、父離れできない子か、「中七・下五」が好い。	置き去りの靴やかたばみ咲く野原 靴の主は野原を素足で駆けてるのか？	五月雨るる能登の棚田のころ旅	紫陽花や鯉のうねうね見えて居る	雨音のリズムに踊るバケツかな リズム、踊るが効いてます。リズムが梅雨籠りの憂さを晴らしてくれ そう。憂鬱な季節を楽しく詠い上げた句。	喉しびる泡の旨さよ朝の生	梅雨寒や己一人の美術館 季語と美術館が響きあってます。「私ひとり」と健気さもありかと。	黒南風や音無き匍草の鉾	上げ底の梅雨や今日また傘いらす 「上げ底の梅雨」という表現が愉快。「上げ底の梅雨」が、ユニーク で、冷めた表現が秀逸である。	
岩本展平	良月	雪待月田猫	椿	大東暮風	佐藤幹子	染谷風子	横井あらか	岡崎梗舟	石川順一	癒香	持永喜夫	丸山マスマ	絵夢	総太郎	

水明インターネット句会（選句・選評）															令和七年六月
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	
しんい 梗舟 ひろし 六弦 一葉香 癒暮風 幹子	彩香 順一	喜夫	土璃 癒香		山菜 佳月		素風	破れ蓮 かれん 風舎 直子 ひろ志		破れ蓮	総太郎	瞳人 允孝	一葉 風舎		
緑蔭に紅白帽の豆画伯	七人の聖書読む会百合の部屋	夏めくや戸を少し開け風を入れ	鳶風に抗ふ岬（さき）の連鷺草	真青な空の天蓋八重桜	毒抜いて青梅の如く妻となる	紫陽花にしづくひと粒十つぶに	糸蜻蛉捕らへんとして風に消ゆ	あご飛んでひかる海へと舵を切る	麦の秋猫の大群やつて来る	葉の色に身を潜めたる青蛙	夏休み推理三昧金田一	妻逝きて残る昭和の夏帽子	短夜や閉店間際二割引き	米山カラー リング	
新 暦文	くるみ	衛	光雲2	幸子	ありぎりす	しーしー	破れ蓮	河野凡士	神谷たくみ	安田蝸牛	宇田靖之	森 佳月	檜鼻ことは		
斬新な主観表現であり、潔い鯰の面構えが浮かんでくる。															
夏帽をかむりし老婆の姿を懐かしむ、気持ちのそくそくと。長年連れ添った奥様の御霊よ安らかにと、帽子をいつまでも大切になさってください。															
二言を言わぬ鯰の面構へ															

水明インターネット句会（選句・選評）															
令和七年六月															
76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	
落雷や地震の如く家揺るる	醜さを知るか知らでか羽抜鶏	夏風邪や玄関先に朝採れ野菜	笛吹川の徒歩鵜飼が目浮かぶ。	笛吹の川面に映ゆる徒歩鵜かな 花芙蓉に広く染まる美しい色が見え、夕の色に興味をそそられる物語を感じた。	咲き満ちて夕べの色に花芙蓉	梅雨寒し賞味期限みな間近	朝の雷にはびつくり‼‼️。 カツコウの初音消される朝の雷	あいつ、どうしているのかなあ、おれはかくの如し、さ。 木苺を含み幼き友の顔	毒を秘め傘照り映ゆる梅雨茸 あるある。生き物のようにうごきます。	青葉風捕らえて見れば鮑屑	踏まないで葉を閉じ眠る片喰草	極彩のネオン眩しや夏夜風 10代後半には誰もが青春の挫折を味わい太宰に惹かれる。	誰にでも心折れる日桜桃忌	外敵から襲われないように保護色として隠れている様子が伺えます。 葉の色に身を潜めたる青蛙	雨が水面に作る輪が静かに重なっていく様子と、それが田んぼに広がっていく情景が目につきます。心安らぐ一句です。雨の日の植田の波紋が幾つも重なり広がり、田植えの済んだ田の景が浮かびます。雨の波紋が幾つも重なり広がり、田植えの済んだ田の景が浮かびます。
秋谷風舎	俳翁	新井のり子	松田素風	ひろ志	高原ひろし	和田イチ子	いさむ	しんい	後藤允孝	岩清水彩香	立野音思	荒一葉	安田蝸牛	一駄歩	

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年六月
ことは 幹子	一駄歩		あらか	凡士 しーしー		梗舟		俳爺	のり子	しんい 田猫		くるみ	風子	凡士	
青葉風小紋に薰る江戸の粋	かちわりや五回裏にはぬるい水	猛暑来る身にまとうものすべて罰	二日酔ひ懲の食パンいらんかね	楚々と立つ十薬群れて猛々し	梅雨晴れの真昼の月の孤独かな	テンガロンハットで掬ふ石清水	皮脱ぎしトマト涼しや最後の香	邪気の無き子らの視線に蛍かな	暑き日や無防備の犬腹を出す	トルコブルー海の色なるソーダ水	スーツの裾早足に揺れ小判草	老鶯や武者の行きたる切通し	さみだるる「赤い殺意」のロケの家	哲学顔なに猿猴でさ梅雨晴間	落語のさわりのようで面白い
粋ですねえ。江戸小紋の良く似合う着こなしが、季語と相まって清々しく感じました。薰る粋が良い	夏暑さがより感じられます。		朝っぱらから失敗のダブルパンチで気分も投げやり、といったところでしょうか。これが友人の詠んだ句なら、「要るかアホ」からの説教コースなんだけどなあw	一本一本は可憐なのに群れるとね。		掘りの深い外人が日本の田舎道を散策していたのでしょうか？		ほたるを見つめる子らのいとけなさを感じる。		地中海の色を想い、ソーダ水が美味しそう。青の具体的な色名が良い。清涼感のある句。		季語が効いていると思います。	今村昌平監督の問題作を句材とした作者の発想の斬新さ。		
丸山マスミ	大越マーガレット	総太郎	青木鶴城	みづる	霜里	石関六弦	小林土璃	平野楽	龍野ひろし	かれん	山川充	石井直子	森下山菜	瞳人	

水明インターネット句会（選句・選評）															令和七年六月
120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	
				しーしー			ヨネヤマ 一駄歩	ヨネヤマ	山菜 土璃		彩香 六弦				
				エニシダの黄の明るさよ華やぎよ 季語の特徴をうまく謳い上げてますね。	梅雨晴れやそよ風重く湿りたる	六月や母の迎えし傘に入る	合唱の声の低さや梅雨に入る 音の変化で季節を感じるのが素敵です。雨音に教室の窓から声も低く聞こえてくる。よくわかる。	紋白蝶じょうろの水と戯れる じょうろの水に蝶が思い浮かぶ。	黒堀に赤い蹴出しや水を打つ 選評：水を撒くお姉さんの色っぽさでいただきました。黒と赤の対比で描く日本の艶がいいです。	恥じらひて露に紫陽花色変えし	新参の色白ジョーガー夏浅し 季語の新鮮な瑞々しさがカナカナのジョーガーと色白、新参に響きリズムがジョーギングのように軽やか。夏の初めの爽快感が感じられます。新参者はご自分なのかな？	蚤刺され貧乏揺すりで膝踊る	黒南風や音無き匍草の鉾	蒼き薔薇棘は密かに秘めやかに	持永喜夫
				大東暮風	雪待月田猫	椿	横井あらか	佐藤幹子	染谷風子	癒香	岡崎梗舟	石川順一	絵夢		